

第五詩集 懸垂する魚群

(1995-2003、挿し込み歌はフィードバックした20代の作)

半世紀の紙屑桜

紙屑桜は半世紀を超え
琥珀の空洞を滅滅と記憶喪失したか
紙屑吹雪き底なし碧空への乱舞
春も踊りも陶酔も出立も昨日の錯覚だった
何もないのに希望という作為
生と云う名の魚群のホロスコープ
いくら差し伸べても掴まらない質量
すべからく生まれ死んで死ぬだけ
死んでも永遠に魚群の投影
跳ねても結局ただの光子(こうし)
ブラックホールに吸い込まれ舞い散る舞い消える
魚たちのめでたい半世紀記念の花見一瞬

逆巻く逢瀬

さらに半世紀の諧謔逢う訣かれるの血判
逆剥ける寂寥真空の冷凍庫に睡る
時の刻みは逆巻く逢瀬
可成り昔の甘美の余韻
馥郁の庭園を記憶に移送せよ
黒揚羽の水場を薔薇で占拠せよ
これ以上の歓待はない
死までの痛みを麻薬しよう

懸垂する魚群

来ない春を計げて四月の雨は降る
夢の髣髴を濡らして雨は降る
桜の花がいつ咲いて
いつ散ってしまったのかも報せずに
花吹雪に永訣は突撃して窒息した
あの春契った未来の再会果たせず
ずっと逢いたいずっと一緒ずっと
幾度桜の季順を巡っても逢いたい
来ない春は過ぎた青春の振り返り
雨に佇む公園の静止した日時計
過ぎる振り返る過ぎる振り返る
時の静止とともに凍てついた噴水
垂れ下がる魚群の辛酸の
瀝る懸垂そのままに
透明な四月の時間そして驟雨
生も死も恋も失意も何も
すべて四月の透明な記憶に流れ去り
都市の迷妄の下水道を巡り
海に消えていったという
二度と来ない春とともに

地球の超期記憶

すっかり忘れてしまっていた。

あの光る水平線が意識に侵入する。

北欧の碧い瞳の少女の微笑が招く。

埋葬された「神の池」の地下宮殿に映る幻影。

白砂は舞い上がり、怒濤は雷鳴する。

どこまで行けども砂丘は砂丘でしかない。

失われた水海は蜃気楼の琥珀ホログラムとなり。

地球の超期記憶として保存される。

残酷な午後の睡蓮。

逆さ観音の溺死体が流れ着く。

注・神の池；鹿島灘神栖地区に以前存在した砂丘のなかのエメラルド色の池。水郷国定公園に指定されていたが愚かな工業地帯の開発で縮小されたコンクリートで囲まれた。その神秘的な光景を筆者はただ一度目撃記憶した。それはイスタンブールの地下宮殿の蜃気楼のように残映となる。

海から

その眸はその日を見ていた

海からアレが上がるのを

いのちの意識や魂や

多くの蟲やら魚やら

足の生えたぬめぬめしたあいつら

胎盤をぶら下げて這いずり回るやつとか

もしかしたら母だのたとえば鯨だの

実体や幽体や意識やらもまぎれて

ぞろぞろぞろぞろ上がってきた

その日が絶対地球の記念日だよ

海の惑星に陸が認識された日

すべては海から

そう海から

海という生命体が子孫を陸に吐き出した

そして惑星は生命で満杯になるまで

そんなにはかからなかった

次に地球はわれわれをどこへ吐き出すのだろうか

海の時間

詩的相対性の理論では

海の時計は陸より遅い

陸に生物が上がるまで

いったいどれぐらいの

想像できないぐらいの

永い時間があったのか

地球の時間を一として

宇宙の果てまでの光年

それ位の時のちがいで

海の時代があったのだ

だから人の一生なんて

遺伝子の分子のサイズ

それが宇宙の時空間を

創造できるなんて全く

なんて凄いことだろう

波の還しにさらわれる

砂の一粒より小さい私

探して欲しいと光出す

本の一寸で消えるけど

難破船の還る日

いつ喪くしたのかも忘れてしまった追憶公園の
プラタナスが噪ぐ究極の秋空の碧い眼底から
もうすっかり忘却していた難破船が
じつは予定通りに還ってくる日が遂に
やってくるのだもうじき
あの遊び疲れた公園の友達と
夕食を告げにくる妹たちの
家で待つ祖母や父母
みんなが連れて行かれたあの日
一人佇んで呆然といつまでも待ち続けた長い夜
あれから太陽はどれくらい廻ったのだろうか
すべては夢だった途方もなく長い旅をした
ブランコは囁く
漕いでも漕いでも届かない夢を
滑り台は呟く
降りても降りてもまた昇れと
砂場は嘯(うそぶ)く
掘っても掘っても未来は見えないよと
それでも友達より多く遊ばなくては大人になれない
どうしてそんなに大人にならなくてはいけないのだ
子供のまんまで逝った「新聞少年」は
回旋塔にぶら下がったまんま寂しく問いかけ消えた
そうすべては難破船の還る日のために
誰もがこうやって辛い旅をしなくてはならないのだ
積み忘れたおまえを屹度迎えにくるから
あの胎内で耳にした麻断の音階とともに
ああ陶酔の馥郁たる腐臭を漂わせ
ほら乳色の蜃気楼の彼方から
もうじき難破船が還るよ

注…中二の冬新聞配達中に

交通事故で夭折した級友高橋邦夫君の魂に捧ぐ。

海と少女（挿し込み歌）

海を見つめていたのよ

ただそれだけのことだけど

潮風優しく私の目を濡らしたの

帰らない誰かが

帰らない何かが

いつか帰ってくる

そんな気がするの

海を見てると

海よあなたは どうして

変わることもなくいつの日も

そんなに優しい歌が歌えるの

思い出せないけれど

あの日も聴いていたの

夢を辿ってゆくと

思い出せそうなの

そんな昔に

海と歌っていたのよ

ただそれだけのことだから

誰にも声など

かけて欲しくなかったの

帰らない誰かが

帰らない何かが

いまに帰ってくる

ような気がするの
海と歌うと

第六詩集 花の詩集

ローダンスの記憶

ウスバカゲロウの羽のように
脆弱な花卉が震える
ローダンスの記憶はいつしか
遠い荒野を裸馬に乗り駆け巡る
若い魂が双つ未来に怯えて
春風にさえ戦慄き
生死に揺らめく儂い交歓
そんな短い夢を見た
生命の輝く瞬間が
どの生物にもあるんだよね
でもそのときはつゆも知らずに
恐怖に苦悶する夢醒め
そしてやがて老いて
悔恨の出納を合わせようと
甘やかな記憶を紡ぐ死前夜
扉を叩いておまえが還ってくるような
胸躍る予感が息を弾ます

エンジェルダストか春の雪か
ローダンスは虚ろなうつつの余韻
南の風に乗ってやってくる
海を超える斑蝶（まだらちょう）の
翻る鱗翅の幻覚か
ああ私はそうして死ぬのだ

サイネリアの透明な髻髻に捧ぐ詩

なぜになにゆえにどうしてかわからない
いくら叫んでもいいいくら血を流してもいい
答をくれるなら応えてくれるなら
この河岸とあの彼岸と
そんなに容易く行き来できるなんて
証明してくれなくてよかったんだよ
それも行ったきり還ってこないなんて
呼んでも呼んでも振り向いて笑うだけなんて
少年のころからよく夢に見るよ
原宿と渋谷の間の土手に座って
電車に向かって絶対に僕に向かって
手を振る少女がいつもいて
僕は渋谷で降りて急いで戻ってみるけど
もう少女はいないいつもいない
でもいまでも毎晩見るんだよ
その場で電車から飛び降りればあなたに逢えるなら
ボクは飛び降りたっていいと思って
ドアコックを捻ってドアを開けて
飛び降りたら墜落してあつという間に覚醒する
どうしても届かない少女って
男ならみんな知ってるだろう？
死んでもさわれない透明の少女って
悔しくて哀しくて涙が出るよ

結局いつかは写真になっちゃやし
みんな写真になっちゃうんだよ
宇宙の永劫風に吹かれ散るんだよ
そんなのって耐えられる？
想像の限界を超えるよね
生きることにはみんな悔いがあるんだよ
どうしても届かない未練があるんだよ
あっちの河岸でもこっちの河岸でも
残念は絶対遺るんだよ
だからずっとみんなと一緒に
こっちにしようよ
ずっとずっと前のお返しに
いっぱいお見舞いにも
行ってあげたのに
なんで教えてくれなかったの
あんなに沢山の仲間に
幸せを贈ったじゃない
それなのにそんなのだめだよ
何も告げないのはいけないよ
みんなに見守ってもらわなかったのは
そんなの全然美しくないよ
決してだれも許さないよ

最後はあなたの歌った

サイネリアの歌が

あなたの透明な髻髻を映出する
するとあなたはそこに
笑って手を振る少女の時に戻っている
今ここではほらみんな一緒だよ
あのころのみんなの輪に天から極光が射し込む
どうしてもそうして訣かれたかったよ
あの歌を静かに合唱しながら

注…あの歌…お見舞いから抜粋

あなたの好きな薄紫の

ワンピース

着て来ました

あなたのでくれた木のペンダント

今日こそはして来ました

窓の外には光を浴びて

町はどこまでも白い

早く元の元気なあなたに戻って下さい

心ばかりのサイネリアの花を

枕元に飾りましょう

心ばかりのサイネリアの花を

枕元に飾りましょう

寒河江光氏作「お見舞い」

紫陽花の恋人（挿し込み歌）

六月の雨の合間の

ふと射した晴れ間のような

あなたの微笑みぼくを突然

光の中へ投げ出したよ

失った夢を追い駆けるだけの

後ろ向きの日々を送るしかない

諦めていたぼくだけで
それよりもしかしたら
もう一度歌えるかも知れないと
何となく感じたのさ

思い出を断ち切ることが
こんなにも容易いことと
あなたの微笑みぼくに教えた
それはなんの勇氣もいらないと
失った夢は美しいだけで
今ではぼくに何もくれないけれど
それよりもっと素晴らしい
明日がもしかしたら
もう一度輝くかも知れないと
何となく感じたのさ

とびきり高い向日葵

遠い国で悲惨な戦争があったと
晩夏の碧空に聳える
とびきり高い向日葵が素頓狂な声で叫んだ
そうか、おまえには見えるんだ
この夏はとくに暑い
シールドはとうに破壊されて
遠い国の戦苦は間もなくここに届く
高速の津波の様に時の海を駆ける
そおして都市は消滅を間もなく迎える
断末魔の太陽は血反吐を嘔き
海はうねり道は断たれ地下道は途絶する
こういう時は人心も止め処なく惑う

もう遅いそんなに噪ぐな
いずれは皆死を迎える
そんなに逃避を急ぐな
苦痛も生、快樂も生
ずっと続くわけじゃないさ
ほんと
おまえはもう見切っているね

秋が橋の向こうで（挿し込み歌）

秋が橋の向こうで
私を待っている
けれど私はまだ
橋を渡れない
枯れた向日葵が
夏の終わったことを
私に告げる
早く橋を渡って
秋に会いに行かなくちゃ
けれど私はまだ
橋を渡れない

コスモスの地平線

全部コスモス
ここは天国？
ここはもう秋
高原の風は冷たい
コスモスは青春の花

あの日、清内路の山村の
小川の小道ですれ違い
振り向きざま淋しそうに微笑んだ
少女は別れを予感していた
一度激しく燃えた炎が
決して永遠には続かないことを
少女は本能的に知っている
だから精一杯燃え尽きる
だからおまえは美しい
あの微笑みが俺の脳裏に
残映になっつと残る
逢いたい
でも二度と掴めないおまえ
コスモスは屹度縁きりの花
おまえの影を愛する運命の花
ずつとコスモス
見えない明日が
ふりむくしぐさ
それでも見えない
すべてコスモス
地平の果てまで
全部コスモス
この世のコスモス
あの世へと続く
あの世も屹度
こんなコスモス
離ればなれのふたつの意識
ずつと淋しい、だから
ずつと逢いたい

薔薇が馨る夜

ある日空からエンジェルヘアーと見紛うあたたかい雪が降った
誰もが踊りながら飛び出したら10年後にはみな死んだ
よい目にあうと滅びが早いエンジェルダストはよがりの毒だと
邪教の医師団は耳打ちして絶えたそれから春が来ると体が溶けたい
でも交接の後の悔恨は辛いよ息をしようと窓を開けたらああ薔薇が馨る夜

ブルーローズ

北の国から光る風くる
悲しみをも明るく映す
森と沼に囲まれた病室で
最期の時を予兆する
明日かもしれない10年後かもしれない
窓際でおまえが微笑む
蒼い薔薇の陰で
確率はだれでも同じよ
弾巢を廻すディーラー
おまえは女神か死に神か
男の生殺にぎるはいつも女
昔から決まっているじゃないか
あとはたのんだ
心で呟く

ホワイトローズ

きらきらとダイヤモンドダスト
降り頻る中飛来する白鳥よ
いつからかおまえの未来は空白
夢も望みも真っ白い
白い壁にはホワイトローズ
純潔色の蝶が羽化するように
食器も静物もなにもかも
白くてまったく見えない
昨日までを消すように
風にたなびく白のカーテン
もうすぐ春だ緩慢な雪崩がくる
この白い幻想さえも消すために

杏子（あんず）の樹の下で

甘酸っぱい杏子の樹の下に
子供を従え羽衣を翻し天女が降りる
ファティマの馥郁たる微風を纏い
どの世へ私をいざなうのか
選べというならあなたの胸に
私は少年に還り夢見の刻を過ごしたい
人は人を生み朽ちる
若葉は必ず枯れるしかし春は来る
枯れた落ち葉は春を知らない
だが木の営みは続く
その果てしない流れを見ているのが
あなたの眸かも知れない
私の存在もあなたが伝える

杏子の樹の下で
あなたに逢えた幸運に
私の歓喜は止めどなくそして極まる
ありとあらゆる災厄が集う
死生観に纏わるすべてのおののきを
やさしくやわらかく包容する
羽衣の愛撫もあなたの
ゆたかな胸の揺りかごも
すべて夢ではなかったことを知る
私の体にけして消えない芳香
甘酸っぱい杏子の残り味

四月の風の JUN

四月が近づくと風が変わる
時の流れは待ち通し過ぎて遅い
桜が咲くまでひときわに永い
そんな季節のめぐりがあなたに似合う
何の花もそぐわない
あなた自身が花だから
そよ風に吹かせたい花
どんなふう揺れるのか
どんなふう香るのか
そうしてどんなふう散るのかも
何もかも知りたい
たとえば桜のように
突然咲いて突然散るのか
それまでの永い時間
どんなふうに楽しめるのかを
わたしは知りたくて知りたくて

あなたの影になってもいい
あなたの花瓶になってもいい

「ああ私は何十年もあなたを待っていた
きつと前に会った気もするけどすっかり忘れたから
四月がくる度にあなたを待っていた
四月の風に何か欠けていた幾十年
あなたに逢ってそれがわかった

四月の風の JUN

桜が散ると季節の巡りは速度を増す
でもあなたはずっと

四月の風に吹かれて咲き続ける
なんの飾りもない清楚な花

四月の風の JUN

ラベンダー消去

一斉のラベンダー畑遠くまで
夢から覚めたら一斉に消去とは
あれはいつたいた何だったんだろう
色も香りも一瞬に消えた
一生というのはこのようなものだ
光が射したと思っただらもう闇だ
その一瞬にあまりに多くを詰めすぎたので
爆発しちゃったんじゃないか
サブリミナリーな記憶だけ
意識の底にしまい込んでおこう
いずれすっきり消えるのだけれど
北国の日射しはあまりに眩しく
一瞬にして盲いたようだ意識はある
開けてはいけない初恋の念

処女の君は処女のままに
新しい性器は新しいままに
私の五感にしまい込んでしまおう
それ以外に方法がないんだよ
はたちのままのあなたを知るのは
世界中で私だけこれだけは確か
あれほど美しい光はあり得ない
ラベンダー畑と一緒に
私の記憶から消去されても
いつかは復帰する意識的な消去だから
忘れるべきだ思ってはいけない
ラベンダー畑の倒立した蜃気楼だ
でもラベンダーかほるかほる

あの夏

血だらけの花園

すべての花は凶器を自らに突きつけている
季節は七月屋上遊園の回転木馬から
痺れやかな音楽が流れてくる日
マネキン人形は悉く自爆して
ぬめぬめした内臓を露出して羅列する
花畑は血にまみれた謝肉祭
のたうつ心臓総ゆる街辻に配置され
回収し難い真昼の見物渋滞

片づけ忘れた未消化の性欲が
再びこの軀に真紅の花粉を噴霧するか
その限り凶器はすべての花弁に突き刺さっている
やがて花園は血に喘ぎ呻吟するだろう
またしても終了しない祭儀が始まったのだから

生家のマジックガーデン（自画像）

うまれた家には小さな庭があった
そこにはあらゆる果樹があった
夏には桃、枇杷、サクランボ
秋には無花果、柿、柘榴
花は木蓮、梅、桜、つつじに子米桜
木はプラタナス
茗荷に竹の子、紫蘇、山椒
北窓にはフキ、ドクダミ、羊歯、ゼンマイ
南にはパンジー、マーガレット、チューリップ
ガーベラ、鳳仙花、彼岸花
20坪足らずの
小さな庭に
よくもこれだけ
あったものだ
おまけに小さな池づくり
春はザリガニ、おたまじゃくし
夏はとんぼに青筋揚羽
夕立ち、蜘蛛の巣、燕の巣
飽きずに眺めて
育った少年の日
木漏れ日、蝶道、水溜まり

朝にも夕にも蝉時雨
二度とは戻れぬ少年の夏
戻ってみたい少年の日々

白い朝

しろは霧
しろは純
しろは透明
しろは真空
しろは無

しろは虹
しろは未来
しろは希望
しろは憧憬
しろは無限
しろのキャンバスに
白い薔薇一輪
しろい日射しに
記憶の恋人
なんてしろいへや
しろい一日がまた始まる
夏の朝霧

しろは消去
しろは転換

しろは輪廻

しろは悔恨

しろは反宇宙

明日の来ない夏の朝霧

渚の記憶

地球の朝が始まった渚

夢も希望も未来も忘れて

真空のときに浸る瞬間

心の揺らぎは砂浜にさざ波を巡らす

そんな朝もあったね

まだ新しい体を洗う

二人で恥じらう花園の余韻

このまま地球が滅びても

何の悔いもないと君は呟いた

あああれから何回夏は過ぎたのか

すっかり忘れてしまった

人は自分を隠して死に地を探す

単調な日日の繰り返しに忘れる

瑞瑞しいあの瞬間を

もう一度渚に還れ！

まだ渚がそのままであれば

だがおまえは変わってしまった

おまえが変われば渚も変わる

それでもいい

せめて渚の記憶に戻れば

天空を廻っていたおまえも降りる

至福のときがわたしを包む
そしてこの世は終る
最期の夏

少年と少女

少年はずっと少年
けれど少女はすぐに枯れた
少女を見失った少年は
いまも夏がくると
真っ白い補虫網をかかげて
木漏れ陽の蝶道を
血眼に巡っているのだろうか
掴めぬと知りながら
銀色の逃げ水を
追っているのだろうか
けれどももうずいぶん経った
おまえももうじき死ぬのだ
陽に灼かれた蟬のように
もうじき墜ちるのだ
少女に大分遅れたな
それだけ永く夢を見たんだよ
一瞬アキアカネがよぎった

夕陽の迷い

森も沼も空と染めて
下総の里に夕陽が沈む
これ以上ない赤い太陽だ
石器の頃から
縄文を経て
弥生も超えて
歴史の時も変わらない
下総の停止した時間だ
だが今日は一寸違う
沈む太陽ではないのだ
愈愈その瞬間がきたのだ
夕陽が滅びの象徴から変わる
沈むのを辞めるその時
世界は黄泉還る
神にプログラミングされた
時の流れと諦めないで
夕陽を引き戻そう
一度諦めた生命の炎
消すのはまだ早い
時のゼンマイを逆巻こう
夕陽が沈むと誰が決めた
そうだ
下総の里に夕陽よ昇れ

(2003年10月退院前の病室にて)

月の笑う晩舟は出る (挿し込み歌)

たれかおしへてくださいひ どのみなとから ふねはでるの
たれかおしへてくださいひ ぼくものれますか そのふねに
たれかこたへてくださいひ つきのわらふばん ふねはでる
どこかのみなどから どこかのせかひへ ふねはでる

たれかかへしてくださいひ あしたといふひを ぼくのてに
たれかかへしてくださいひ けれどもうおそひ ふねはでる
たれかさけんてくださいひ つきのわらふばん ふねはでる
どこかのみなどから どこかのせかひへ ふねはでる

みんなうたはてくださいひ ぼくがうれしそふに てほふるとき
みんなうたはてくださいひ ぼくがかなしそふに てほふるとき
たれかつたへてくださいひ にどとかへらない ふねのこと
ぼくのちちやははに どふかゆるして くださいと

(1970年20歳時制作)